

熊本地震におけるコミュニティラジオ局の対応

— 校歌のリクエスト放送の事例に見る音響共同体の位相 —

The Disaster Response and Mitigation of Community Radio Broadcasting after the Kumamoto Earthquake 2016 : The Phase of an Acoustic Community in Case of School Songs in Disaster Broadcasting

兼古 勝史

Katsushi KANEKO

概要

2016（平成28）年4月の熊本地震において、地元熊本市のコミュニティFM局「熊本シティエフエム（FM791）」では、本震直後に停電のため放送できない状況に陥ったが、局スタッフの努力と機転により約40分後に放送を再開し、その後「命を守るための放送」から「命を繋ぐ生活情報」「前向きに生きていくための情報」と災害からの時間や地域の実情に応じて放送内容をシフトさせつつ、レギュラー番組とCMを停止して24時間の生放送を17日間に渡って続けた。その中で実施した、リクエストによる熊本市内各小学校の「校歌」の放送は、大きな反響を得、避難生活で不安を強いられていた市民の心の支えとなったといわれる。

本研究において、震災発生直後からの熊本シティエフエムの放送・対応を振り返るとともに、同局による「校歌」のリクエスト放送とその反響について、それを可能にしたこれまでの「校区」に密着した番組作りや取り組み事例等を合わせて検討することで、災害時における地域音声放送メディアが被災者の支援に重要な役割を果たすことが明らかになった。また「校歌」という地域の聴覚的文化資源について、“時間的な音響共同体”及び“記憶としての標識音”という概念で説明できる現象の存在が示唆された。

キーワード：熊本地震、災害放送 コミュニティラジオ、校歌、音響共同体、標識音

Abstract

At a main shock of Kumamoto earthquake in April, 2016, “Kumamoto City FM” stopped broadcasting. However, a broadcast could be resumed 40 minutes later by staff’s effort. After that for 17 days, the station continued the live broadcasts without stops for 24 hours. Tendencies of the broadcast contents changed with the time elapsed. Immediately after, necessary news was the information to protect the life, in the next, the living information to survive, and the third phase is the information and service to live positively, In particular, many sufferers from disaster were heartened by the request broadcast of school songs, and Kumamoto City FM got many public

responses and empathy.

The purpose of this research is look back to earthquake disaster response of Kumamoto City FM, make it cler, review the role of the area sound media at the time of disaster, and consider about a request broadcast of school songs and the response, from the angle of the soundscape using a concept as “Diachronic Acoustic Community” and “Soundmark as the Memory”.

Keywords : kumamoto earthquake, disaster broadcasting,community radio, school songs, acoustic community, soundmark

目 次

- 1 はじめに
 - 1.1 研究目的
 - 1.2 研究の対象と方法
- 2 放送局の概要と震災の被害状況
 - 2.1 熊本シティエフエム (FM791) の概要
 - 2.2 熊本地震の被害状況
- 3 放送局の対応
 - 3.1 前震時
 - 3.2 本震時
 - 3.3. 放送内容の推移
- 4 校歌の放送について
 - 4.1 リクエストによる校歌の放送と反響
 - 4.2 校区に特化した放送
 - 4.3 県庁所在地型コミュニティ放送の課題
 - 4.4 「校区」をテーマにした様々な取り組み
 - 4.5 番組「校区のチカラ」の放送
- 5 校歌と音響共同体
 - 5.1 地域の音文化資産としての校歌
 - 5.2 音響共同体の2つの位相
 - 5.3 記憶としての標識音
- 6 おわりに
 - 6.1 まとめ
 - 6.2 今後の課題

1 はじめに

1.1 研究目的

自然は時に人智を超えた猛威を振り私たちを翻弄する。2016年4月に起こった熊本地震もまたそうであった。一度目の大地震の二日後に更に大規模な地震が襲ってくると、誰が予想し得たであろうか。私たちの生命・財産・生活に深刻な打撃を及ぼす災害は、私たちの社会の備えやインフラが試されるときでもあり、普段は見えなかった地域の様々な力が表に現れるときでもある。

本稿は、2016（平成28）年熊本地震（前震＝4月14日、本震＝同16日）に際しての、地元コミュニティFM放送局「熊本シティエフエム（FM791）」（熊本市中央区辛島町8-23／松本富士男代表取締役社長）の対応や取り組みを明らかにし振り返るとともに、そこから得られた知見、とりわけ同局による熊本市内各小学校の校歌のリクエスト放送の実施とその反響の事例について、サウンドスケープ研究の観点からの解釈を試みるものである。

1.2 研究対象と方法

熊本地震の直後、被災地域では4つの臨時災害放送局が開局した。筆者は、震災から2カ月が経過した2016（平成28）年6月中旬に熊本県に入り、4局のうち、その時点で活発な放送を継続していた3つの局、「熊本シティエフエム」（熊本県熊本市）、「みふねさいがいえフエム」（同御船町）「ましきさいがいえフエム」（同益城町）を訪れ聞き取り調査を行った。このうち今回の報告の対象である「熊本シティエフエム」は、地域のコミュニティエフエム局として熊本市域に20年来放送してきたが、震災後の4月18日から30日の間は、臨時災害放送局の免許を受け「くまもとさいがいえフエム」として放送を行った。調査にあたっては、本震時の災害放送等の対応を担った同局の長尾修営業部長（以下 長尾部長と記す）に取材し、聞き取り調査を行うとともに、当時の経過や対応をまとめた同社の報告資料、新聞記事等を参照にした。同局への取材調査は2016（平成28）年6月18日（土）に実施した。

2 放送局の概要と震災の被害状況

2.1 熊本シティエフエム（FM791）の概要

熊本シティエフエム（以下「FM791」と略）は、1996年（平成8年）4月1日、九州で最初の、全国で30番目のコミュニティエフエム局として開局した。社員数は19名（役員、嘱託含む）、市と地元メディア・銀行・百貨店等計18社による第3セクターの放送局だ。出力は、空中線電力20w、エリアは熊本市（人口74万人弱・世帯数31万6千世帯強＝2016年現在）のほぼ全域と周辺市町村の一部を含む熊本都市圏（人口約100万人）をカバーする。設立の目的は、設立前年の阪神淡路大震災を受けて、「地域密着」「市民参加」「防災」である^(注1)。「FM791」の聴取エリアは【図1】に示した通りである。



【図1】熊本シティエフエムの聴取エリア

2.2 熊本地震の概要

次に「2016年熊本地震」の概要を示す。

前震；4月14日（木）21時26分

震源；熊本県熊本地方

規模；マグニチュード6.5

最大震度；7（熊本市内は震度5強～6弱）

本震；4月16日（土）1時25分

震源；熊本県熊本地方

規模；マグニチュード7.3

最大震度；7（熊本市内は震度6強、一部6弱）

（国土交通省気象庁 2016 震度「データベース検索」^(注2)より、熊本市内の震度は一般財団法人日本気象協会 2016 「Tenki.jp」^(注3)より）

被害状況は、死者50人（震災後の関連死を含めると211人）、負傷者2,746人、住宅全壊8,682戸、半壊33,660戸、道路損壊1,777箇所、山崩れ680箇所という甚大なものであった（内閣府 平成29年3月14日「平成28年（2016年）熊本県熊本地方を震源とする地震に係る被害状況等について」^(注4)及び警察庁 平成28年8月15日「平成28年熊本地震に伴う被害状況と警察措置」^(注5)より）。

3 熊本シティエフエムの震災対応

3.1 前震時の対応

熊本地震に際してのFM791の対応の経緯（概要）は右の【図2】の通りであった。

前震のあった4月14日は、新年度が始まったばかりであり、FM791はこの夜、新入社員等の歓迎会だった。19時に生放送が終了し、衛星放送（ミュージックバード）からの音楽番組に切り替わった。新人歓迎会が滞りなく終了し、一部は二次会へ流れ、何人かが荷物を取りに社屋に戻った21時26分頃、震度6の烈震が襲った。その時、東京のスタジオからオンエア中だった衛星放送の番組パーソナリティが緊急地震速報に気づき、即座に「熊本県地方に大きな地震の恐れ」があることを呼びかけた。これはラジオとして熊本市民にもっとも早く伝わった緊急地震速報のひとつだったといわれる。

阪神大震災を受けて設立されたFM791は、熊本市と協定を結んでおり、災害時には24時間放送の対応を行うことになっていた。21時41分に割り込みによる第1報の地震速報を実施し、その後

熊本地震に際してのFM791の対応（概要）	
4月14日（木）21時26分 前震 最大震度7	21：41 割り込み第1報、21：51 自社放送～24h 放送
4月16日（土）1時25分 本震 最大震度7	停電、2：10 頃発電機と移動式ミキサーで放送再開
4月18日（月）～30日（金）	臨時災害放送局として放送
5月1日（土）7時～	通常放送に戻る
※ 4月14日（木）21時51分から5月1日（土）7時まで、17日間生放送を実施。レギュラー番組およびCM全停止。	

【図2】熊本地震とFM791の対応

10分間に4回の速報が伝えられ、21時51分には自社スタジオからの送出へ切り替えとなり、24時間体制の放送が開始された。地震震度速報、安全確保の呼びかけ等を中心に朝まで放送し、朝から通常番組の内容を変更して放送したが、前震の段階では、ライフラインも交通機関にも問題はなく、地震関連の情報としてオンエアしたのは「地震ででたゴミの出し方」くらいであったという。

前震発生後、熊本市は災害対策本部を設置し、余震も続いたため、社員2名とパーソナリティ3名が、夜間待機勤務を行った。



【写真1・2】前震直後（4月14日21時45分）の熊本シティエフエム局舎内とその日の生放送中のスタジオ
（写真提供：株熊本シティエフエム）

3.2 本震時の対応

2日後の4月16日深夜1時26分、前震の規模をはるかに凌ぐ揺れ（マグニチュード7.3、最大震度7、熊本市内は震度6強）が襲った。何かつかんでいないと立ってられないくらいの衝撃と震動が、約30秒～45秒続き、約5秒後には局舎を含む地域一帯が停電、CDラックや棚が倒れる音が暗闇の中に鳴り響いたという。非常用USP無停電電源装置が起動せず、スタジオからの放送送出が中断。暗闇の中、携帯電話のライトで床を照らして復旧作業にあたった。実は震災の前年、2015年8月の台風15号の際、FM791は、郊外の金峰山にある送信所が停電し、豪雨の中発電機を載せて向かった車も途中で立ち往生してしまい、発電機を山上まで徒歩で運び上げる間、約五時間に渡り停波する、という苦い経験を味わっていた。「今回は何としても音を出したい」との思いでスタッフは必死で取り組んだ。幸い台風の際に使用した発電機がエレベーターホールにあったほか、教訓から防災グッズも揃えていた。「これ（発電機）でなんとかならないか」「やりましょう！」電源を確保し、スポーツ中継用の移動型小型ミキサー卓にマイクを入れマスターに直結、携帯ラジオの受信音声をモニター代わりにし、2時10分頃放送再開にこぎつけた。本震から約40分後のことだった。

第1声は「先ほど、大変大きな地震が起きました。みなさん、命を守る行動をしてください。安全な場所に避難してください・・・。」であったという。（停電中のため残念ながら音声記録は残っていない）。約3時間後の4時30分頃に電気が回復。スタジオからの放送に切り替わった。夜間当番以外の社員も出社して、情報収集が始まった。



【写真3・4】 本震翌朝（4月16日）の熊本シティエフエム局舎
（写真提供：㈱熊本シティエフエム）



【写真5・6】 本震後の停電の際に活躍した発電機とスポーツ中継用移動型のミキサー
（写真提供：㈱熊本シティエフエム）

3.3 放送内容の推移

16日の本震以降、放送内容は状況に応じて刻々と変化した。

1日目の16日（土）は、ひたすら「命を守る情報」の発信（安全確保＝避難所、ライフライン＝電気・ガス・水道の情報→ほぼ全面ストップ）。

第2日、17日（日）以降は、上記に加え、「生きていくための生活情報」の収集（コンビニ、スーパー、ホームセンターなどの開店状況、ガソリンスタンド、コインランドリー、お風呂など）と発信。

3日目、18日（月）からは臨時災害放送局「くまもとさいがいエフエム」として放送を継続、内容は上記の「生きていくための生活情報」の他に「前向きに生活していくための情報」の発信だった。ここで局内の体制を整備し、放送スタッフは3交代制（6：30～／15：00～／22：00～）社員は2交代制（7：00～／19：00～）となった。この時点で、テレビや他のラジオ局は、ほぼ通常放送に戻っていた。テレビ画面には字幕、ラジオもネット番組の合間や自社放送内には地震関連の情報は入っていたが、地震関連の放送を流し続けたのはFM791のみだった。

4日目、19日（火）、それまで、インストゥルメンタルを中心に、あまり影響がない音楽をオンエ

アしていたが、この日以降は、普通に音楽をオンエアする。リクエストの受付が開始された。リクエストは多く、時には2時間待ちの事態になったという。

5日目、20日（水）、大西熊本市長が、熊本市に支援物資は不要と宣言。

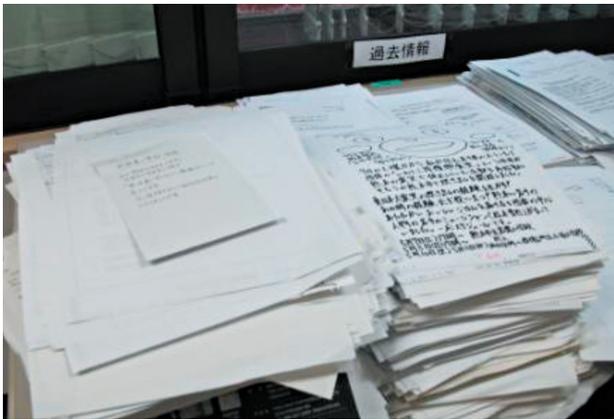
6日目、21日（木）、この日以降は、上記内容を継続しながら、新しい情報を随時放送。

7日目、22日（金）、この日より、市内小学校（94校）の校歌のリクエスト受付開始。放送は、6時30分～22時00分までは、情報を中心に。22時00分以降は、翌日の情報を加え、癒しの放送を行った。

以上が本震から約一週間の放送内容である。

3.4 震災対応を振り返って

FM791の長尾部長は、熊本地震への同局の対応と反響を振り返って「ラジオを本当によく聴いていただけたと思う」と感想を述べている。震災前には1日数十件だったFaxやメールでの情報や要望、



【写真7】

FM791スタジオ内に堆く積み重ねられたFAXや手紙の山
(写真提供：株熊本シティエフエム)

問い合わせが数百件規模に跳ね上がり、大変な状況の中で、「ラジオが双方向のメディアである」ことを実感したという。

このような大きな反響を呼んだ要因としては、阪神淡路大震災、中越地震、東日本大震災を経て、ラジオが地震の時には役立つと言われ続けてきて、防災袋の中には必ずラジオがあったということ、そこに停電が重なり、ラジオがもっとも身近な頼れるメディアとなったこと、SNSなどは情報が早く便利な反面、デマや誤情報も多くまた高齢者には使いにくい、高齢化社会の中

で、SNSより、ラジオ、テレビ、新聞が頼りにされ、その中では速報性、アクセシビリティの点でラジオが優れていたこと、繰り返す余震による建物等の倒壊の危険を避け、夜間車中泊で過ごす人や、車での移動途中に車載ラジオを聴く人が多かったこと、ラジオは聴きながら片付けや買い出しなどが出来る「ながら聞き」のメディアであったこと、などが考えられるとFM791では捉えている^(注6)。

4 校歌の放送について

4.1 リクエストによる校歌の放送と反響

FM791が4月22日から開始した小学校校歌のリクエスト放送では、初日から多くのリクエストが集まり、多いときには1日30校分ほどのリクエストがあったという。校歌の放送は15時から22時までで、ただ歌を流すだけではなく、その学校や地域に関する話題やエピソードも交えての放送だった。22日夜には熊本市西区の避難所で避難生活をしている住民から「70人くらいが避難しており、同地区の池上（いけのうえ）小学校の出身者・卒業生が大勢いるので、ぜひ校歌を流してほしい」とのリクエストがあり、放送するとすぐに「皆で合唱した」との御礼メールが返ってきたと

いう。この他「勇気付けられた」「涙があふれた」「嬉しくて飛び上がった」「癒された」「他校の校歌ももっと聞きたい」などの反響が広がり、新聞等でも報道された^(注7~18)。

4.2 校区に特化した放送

災害時、すぐにこうした対応が可能だったのは、震災の2週間前、2016年4月1日に、開局20周年を迎えたFM791が記念特別番組として熊本市内の小学校全94校の校歌を放送していたことによる。全校の校歌の録音音源が揃っていたのだ。

さらに、そのような特別番組が成立した背景には、コミュニティFMとして、長年にわたり「校区」をテーマに番組や教育事業に取り組んできた活動の蓄積があった。

4.3 県庁所在地型コミュニティ放送の課題

県庁所在地で政令指定都市でもある熊本市圏を放送エリアとするFM791は、コミュニティ放送としてはきわめて厚い聴取者層を抱える有利な状況にあるが、同時に同じ熊本市内の県域放送局などの競合メディアと如何に差別化するかという課題も存在している。県庁所在地型コミュニティ放送ならではのアイデンティティの難しさがあるのだ。「他にはできない、自分たちらしい放送とは何か」を模索する中で浮かびあがってきたテーマが、小学校の「校区」だったという。熊本市のまちづくりや防災、防犯など、暮らしやコミュニティに関わる施策の多くは小学校区の単位で動くことが多く、「校区」から地域の営みや課題、まちがづくりが見えてくるのではないか、ということから「校区」に特化した取り組みが始まったのだ。

4.4 「校区」をテーマにした様々な取り組み

開局6周年を迎えた2002(平成14)年度からは、毎月1回市内の小学校を紹介する特番が始まった。また熊本市の職場体験として市内の中学生を対象にラジオ番組の制作・放送体験を実施し好評を得た。これが翌年に始まる公開放送「子どもラジオ局」(毎週日曜日)へと発展し、2004(平成16)年度には、地域と学校と家庭をつなぐコミュニケーションペーパー「FM791子ども新聞」の発行へと広がった。現在も隔月で熊本市内の全小学校児童に配布し続けているという。

4.5 番組「校区のチカラ」の放送

こうした流れの中で2006(平成18)年度、FM791の開局10周年を機に始まったのが、熊本市内の全小学校区の話や街づくり活動等を校区ごとに毎回取材・紹介する番組「校区のチカラ」(月～金曜日放送、現在は金曜日のみ)だった。開始から約4年間は、毎週1回1つの校区を取り上げ、その中で小学校を訪問し生放送で校歌を歌ってもらった。2016(平成28)年春の開局20周年特番で、市内の全ての校歌を4時間かけて五十音順に放送することができたのは、FM791のこうした地道な積み重ねの成果のひとつであったといえよう。

5 校歌の放送と地域共同体

5.1 音文化資産としての校歌

被災地に放送された校歌は、子どもから大人まで世代を超えて届き、多くの人々の心に寄り添う結果となった。突然の震災で、ふるさとの風景、まち並み、日常の当たり前の暮らしが損なわれ、或いは奪われた中で、地域の校歌が人々の心を繋いだことに、私たちは驚きつつも納得し共感することができる。「校歌には地域の原風景が歌いこまれている」と長尾部長は言う^(注20)(兼古 2016)。岩川は、校歌の作詞に風土や地理的要件が反映されやすいこと、また世代を超えて歌い継がれるものであることなどを指摘し、校歌がアイデンティティのよりどころになると述べているが^(注21)(岩川 2017)、校歌とは地域のかげがえのない音の文化的資源のひとつであり、人々を支える力を秘めていることが、熊本地震とそれに対応したFM791の取り組みの中であらためて浮き彫りになったと言えよう。このような事態をサウンドスケープ論の立場から検討してみたい。

5.2 音響共同体の2つの位相

熊本地震においてFM791の放送した校歌の事例は、私たちの社会に潜在するひとつの音響共同体^(注22)(schfer 1977)の姿を明らかにしたといつてよい。「校歌」という音によってつながれた同窓あるいは卒業生・出身者という共同体だ。それは地縁的な共同体に似ているがイコールではない。校歌によってつながっている人々は地域を越え、時間を越えて存在するからである。

これまでサウンドスケープ研究において音響共同体は、特定の現に鳴り響く音を中心に、主として空間的・物理的な広がりともまとまりを持つ共同体、いわば共時的(Synchronic)な共同体としてイメージされることが多かった。教会や寺院の鐘の音が教区や地域を指し示す場合がこれにあたるだろう。しかし、音響共同体には、その共同体の成員たる個人個人が共同体の核となる音を体験する時期は別々でありながら、世代を超えて時間的(経時的)・通時的(diachronic)に蓄積しつつ形成されていくようなケースもあるのではないだろうか。空間的・共時的な音響共同体は、その共同体を統合する核となるシンボリックな音(=標識音や信号音)に対しての物理的な距離や範囲で明示されるが、時間的・通時的に捉える音響共同体の範囲は、音を聴く個々の体験そのものを核にして——空間的な限定は、個々人の当初の体験時を除けばむしろ問題ではなくなり——その音の記憶を持つ人々の存在する期間により規定される。極論を考えれば、その音が現実の物理的な音響としては既に存在しなくなっても(学校の廃止や統合、鐘やチャイムの消失や変化などはこれにあたる)、共同体としては存続している場合もあだろう。既知の音響共同体を考える際にも、こうした二つの位相を併せ持つものとして捉えていく必要があることを、今回の事例は示しているのではないだろうか。サウンドスケープ研究でしばしば言及される「ニコライ堂効果」^(注23)などについても、こうした観点からの再検討が必要であるかもしれない。

5.3 「記憶としての」標識音

このように音響共同体の捉え方に「時間」という軸を取り込むことによって、しばしば音響共同体の統合の核を担うとされる「標識音」(Soundmark)のあり方についても、検討しなければならない。

シェーファーは標識音を「その共同体の人々によって特に尊重され、注意されるような特質を持った共同体の音」(schfer 1977) と規定しているが、共同体そのものが現実の物理的な空間から切り離されて存在している場合、標識音もまた現実空間に鳴り響く音響とは限らず、「体験」や「記憶」のレベルで共有されている可能性が十分に考えらる。それは特定の時間的な幅を持って存在するような音響共同体をつなぐ、共通の「記憶としての標識音」(Soundmark as Memory) なのだ。

6 おわりに

6.1 まとめ

熊本地震での「校歌」の事例は、個々人の経験の中に位置づけられていた「記憶としての標識音」(=校歌) によってつながる、同一小学校の児童・卒業生・出身者という、地域の中の言わば“可能態”として潜在していた時間的な音響共同体が、ラジオ放送で現実の音響として立ち現れた標識音に触発されて強く意識された事例であると言える。あるいは、もともと「記憶の中の標識音」によってゆるやかに結ばれていた時間的な音響共同体を、ラジオへのリクエストという働きかけを通して、人々が現実空間の中に呼び覚ます行為であったのかも知れない。突然の震災とそれに伴う過酷な体験は、それを行わせるだけの充分過ぎる理由であったに違いない。

6.2 今後に向けて

本稿の中で提示した「時間的（通時的）な音響共同体」「記憶としての標識音」という考え方は、今のところ、熊本地震の際に見られた、FM791による「校歌」のリクエスト放送に対する人々の反響を振り返り見て解釈する中で浮かび上がってきたに試論に過ぎない。こうした概念が音響共同体のあり方を説明するものとして妥当であるか否かについては、地域の人々への聴き取り調査や他の事例の検証等を含む、更なる慎重な調査と検証が必要であると思われる。

(注)

- 1 株熊本シティエフエム (2016.9) 「今回の2016熊本地震の対応について」(シンポジウム『地域の声 ラジオの力』発表資料(奈良県奈良市 2016年9月24日開催)より
- 2 国土交通省気象庁「震度データベース検索」
<http://www.data.jma.go.jp/svd/eqdb/data/shindo/>
(2016.12.04 閲覧)
- 3 一般財団法人日本気象協会「Tenki.jp」～地震情報
<http://www.tenki.jp/bousai/earthquake/> (2016.12.04 閲覧)
- 4 内閣府非常災害対策本部 (2017.3.14) 「平成28年(2016年)熊本県熊本地方を震源とする地震に係る被害状況等について」
http://www.bousai.go.jp/updates/h280414jishin/pdf/h280414jishin_38.pdf (2017.4.10 閲覧)

- 5 警察庁 平成 28 年 8 月 15 日「平成 28 年熊本地震に伴う被害状況と警察措置」
<https://www.npa.go.jp/kumamotoearthquake/pdf/zyoukyou.pdf> (2016.12.04 閲覧)
- 6 (株)熊本シティエフエム (2016.9) 前掲資料
- 7 朝日新聞 4 月 28 日 (木) 夕刊
- 8 西日本新聞 HP 4 月 30 日 (土)「古里校歌、毎日オンエア熊本市の災害エフエム、94 校分流す
[熊本県] <http://www.nishinippon.co.jp/nnp/kumamoto/article/24230> (2016.12.04 閲覧)
- 9 読売新聞 5 月 1 日 (日) 朝刊
- 10 西日本新聞 HP 4 月 30 日 (土)「古里校歌、毎日オンエア 熊本市の災害エフエム、94 校分流す」
(熊本県) <http://www.nishinippon.co.jp/nnp/kumamoto/article/24230> (2016.12.04 閲覧)
- 11 読売新聞 5 月 1 日 (日) 朝刊
- 12 産経新聞 5 月 2 日 (月) 夕刊
- 13 Yahoo! ニュース (時事通信) 5 月 3 日 (火) 臨時 FM 局、相次ぎ開設 = 車中泊多く、支援に活用
—校歌のリクエスト・熊本地震」<http://news.yahoo.co.jp/pickup/6199856> (2016.12.04 閲覧)
- 14 毎日新聞 HP 5 月 10 日 (火)「熊本地震 避難所に響け校歌 災害 FM に感謝とリクエスト」
<http://mainichi.jp/articles/20160510/ddf/041/040/019000c> (2016.12.04 閲覧)
- 15 毎日新聞 HP 5 月 15 日 余録「震災が起きた際、被災した市町村など自治体には…」
<http://mainichi.jp/articles/20160515/ddm/001/070/168000c> (2016.12.04 閲覧)
- 16 Yahoo! ニュース 5 月 11 日 (水)「熊本シティエフエムの 17 日間。集めたのは被害ではなく生活
情報」<http://news.yahoo.co.jp/story/185> (2016.12.04 閲覧)
- 17 Yahoo! ニュース 6 月 14 日 (水)「熊本地震 2 カ月 地元の「放送」は今」
<http://news.yahoo.co.jp/story/209> (2016.12.04 閲覧)
- 18 兼古勝史：地域メディア最前線 Vol.53「被災地に響いた校歌～熊本シティエフエム (後)」
月刊『B-maga』2016.8 月号 (株)サテマガ Bi 2016) p73
- 19 2016 年 4 月に開港したばかりの1校を除く (この1校はまだ校歌きていなかった)
- 20 兼古勝史 前掲書
- 21 岩川みやび 2017「小学校における校歌指導の傾向と背景の考察～校歌の持つ力 音楽教育と
地域社会の接点～」『共栄大学研究論集』第 15 号 共栄大学 pp.115-139
- 22 R. M. Schafer (鳥越けい子・小川博司・庄野泰子・田中直子・若尾裕 訳)：『世界の調律』
(平凡社 東京 2006) pp432-437
- 23 ニコライ堂効果 (Niklai Cathedral Effect)；神田サウンドスケープ研究会による神田エリアのサ
ウンドスケープ調査 (1986-87) の際に発見された聴覚的風景の認識に関する特異な現象。かつて
は神田の象徴として知られたニコライ堂の鐘音について、実際には週に一度程度しか鳴らされて
いないにもかかわらず、地域の住民に「毎日聞いた」との証言が少なからずあった事例 (神田サ
ウンドスケープ研究会 1986、1988)。その後、練馬区の寺院の鐘音など他の地域でも同様の現
象が観察されたことから、練馬区環境保全課 (当時) の大野嘉章が名づけた (大野 2004)。聴覚
的風景の認識において、期待や願望、イメージが現実に先行して認識を形作る例として知られる。

参考文献

- 1) 岩川みやび 2017「小学校における校歌指導の傾向と背景の考察～校歌の持つ力 音楽教育と地域社会の接点～」『共栄大学研究論集』第15号 共栄大学 pp.115-139
- 2) 大野嘉章 2004「鐘の音環境の周辺」『サウンドスケープ』第6巻 日本サウンドスケープ協会 p50
- 3) 兼古勝史 2016 「地域メディア最前線 Vol.53 ～被災地に響いた校歌～熊本シティエフエム 月刊『B-maga』2016.8月号(株)サテマガ Bi p73
- 4) 神田サウンドスケープ研究会 1986「神田のサウンドスケープ～その歴史と現状～予備研究報告書」、同 1988「神田のサウンドスケープ～その歴史と変遷」
- 5) 熊本シティエフエム 2016「今回の2016熊本地震の対応について」シンポジウム『地域の声 ラジオの力』発表資料 奈良県奈良市 2016年9月24日開催
- 6) R.M. Schafer 鳥越けい子・小川博司・庄野泰子・田中直子・若尾裕 訳、『世界の調律』平凡社 東京 2006 pp432-437